

「日本ホーリネス教団の戦争責任に関する私たちの告白」の  
**資料と解説**

日本ホーリネス教団 福音による和解委員会



## 目次

はじめに

四

第一章 本文「日本ホーリネス教団の戦争責任に関する私たちの告白」

六

第二章 「戦責告白」採択に至る経緯

一一

一 戦後教団史の中から

一一

二 きつかけの年、一九九五年

一五

三 戦責告白決議をめぐって

一九

四 その後の動向

二二

第三章 「戦責告白」の趣旨

二七

一 私たちの歴史を見る目について

二七

二 私たちの社会を見る目について

三〇

三 私たちの教会を見る目について

三三

四 「戦責告白」の趣旨

三八

第四章 資料と解説 ———— 四三

一 注 ———— 四三

二 資料と解説 ———— 四五

第五章 今後の展望 ———— 一四六

一 私たちの目指すこと ———— 一四六

二 神との和解 ———— 一四七

三 隣人との和解 ———— 一四八

第六章 関連資料 ———— 一五二

一 参考資料 ———— 一五二

・ 日本基督教団「第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白」  
・ 日本福音同盟「戦後五〇年にあたってのJEA声明」

二 関連事項略年表 ———— 一五六

三 参考文献 ———— 一六〇

あとがき ———— 一六三

### 第三章

## 「戦責告白」の趣旨

#### 一 私たちの歴史を見る目について

##### ①戦責告白発表の時期

私たちの教団の戦責告白発表の時期は、諸教派が戦後五〇年に出したのに比べると、そのタイミングはかなり遅いものです。その辺の事情は前述の通りですが、それ以上に敗戦から五〇年以上も経って、このような告白文が出されるのも遅すぎます。実際に他教派の声明等の中には、長い間この問題を取り上げてこなかったことを、怠慢として悔い改めているものがあります。

私たちのあいだで、戦時下の教会の問題点を取り上げられずにきた理由には、教会の体質もあるでしょうが、戦争や弾圧の当事者の方々の傷がまだ癒えていないことが挙げられると思います。キリスト教会ばかりでなく、一般的にも戦争の真実について語られ始めるまでには、多くの年月を要しました。戦責告白

の表にはでてこない事ではありますが、そのような痛みは、歴史を振返る者が、心しなければならぬことであると思います。

## ② 私たちの歴史に対する認識

しかし、長い間この問題が放置されていたことは、正当化されることはありません。最近になって、「戦時下の資料が出てきた」とか、「当時の教会の挫折等は知らなかった」などと言われますが、正確ではありません。知らなかったのではなく、知ろうとしなかったのです。そのような資料はいくらでもあるのです。

その中でもたとえば、この「解説」で紹介する文書の中に、藤川弁護士による「弁論要旨」があります。これは貴重な史料であると同時に、当時の教会の国家や神社への態度を記した、その意味では問題の多い文書であります。この文書は、「御霊の法則（車田秋次著、車田先生米寿記念出版委員会、一九七四年）」に収められ、更に「車田秋次全集第七卷（車田秋次著、いのちのことば社、一九八六年）」に再録されました。これらの本が、当時のキリスト教がおかれていた、厳しい状況を明らかにすると共に、車田牧師の言葉や生涯、弾圧の経験などによって、信仰の継承に益するものであることは言うまでもありません。しかし前述の通り、これまでに二度、公にされながら、その問題点について取り上げられたことは、ほとんどありません。

また、配慮という名のもとに、歴史的事実の公表をためらう体質があります。このような私たちの教会の体質、あるいは歴史に対する認識の程度を、私たちは神と人との前に、恥ずべきではないでしょうか。

## ③ 私たちの歴史観

歴史に対する関心のような事柄について触れましたが、その内容である歴史観にも触れておきます。

戦時下の慰安婦の記述が、教科書に記載され始めたことをきっかけとして、自由主義史観を名乗る人々の活動が活発になっていきます。ここでは慰安婦問題の詳細について触れるいとまはありませんが、彼らの主張の根底にあるのは、歴史的に正確な記述を求めるとしつつ、むしろ正しい日本人としての誇りをもつことにあるようです。

確かに歴史的事実については、正確に調べて検証する必要がありますが、良い部分だけを拾い上げて、悪い部分を覆うことはゆるされないことです。歴史の一面しか知らずに持つ愛国心には、どれほどの価値があるのでしょうか。日本は現人神である天皇が治める神国であるという戦時下の皇国史観と、現代の自由主義史観にはかなり似ている部分があると言えるでしょう。皇国史観が日本をどのような道へ導いたかは、歴史が示す通りです。

さて、自由主義史観研究会の人々の主張が、産経新聞に連載されている時期に、キリスト教伝道者という肩書の人物からの投書が同じ産経新聞に載りました（一九九六年四月一日）。それは長崎の原爆資料館の展示物が、南京に関する資料等、日本の加害責任に触れていることへの疑問です。それらの資料にはたいしたインパクトもなく、加害責任に触れる理由が分からず、むしろそのようなものを見て、若者が日本に対して誇りを持たなくなるだろうというものです。この人物の主張は、自由主義史観を唱える人々に媚びへつらっているのかと思うほど、単純で一面的です。これらも一つの歴史観ではありますが、キリスト教信仰を持ちつつも自らの非を認めると誇りが持てなくなるという発想は、矛盾しています。罪の告白に伴う罪の赦しが、真の自己肯定ではないのでしょうか。

このような主張と全く異なる良い例が、ドイツの取り組みと言えるでしょう。安易にドイツのことを引き合いに出すことは慎みたいと思いますが、ドイツが自らの戦争責任を明らかに出来た一つの理由は、罪

の告白には赦しが伴うというキリスト教的な思考であると言われていきます。日本人の意識には欠けている点です。

さて、以上のような私たちを取り囲む状況に触れた理由は、私たち自身の歴史観を問わねばならないからです。何度か触れたように、私たちの教会では、伝統的に良い面が強調され、過ちについて語られることは殆どありませんでした。リバイバル時の教会の盛んな様子や、弾圧時の信仰の戦いについてはよく語られて来ました。しかしリバイバル時の混乱した教会の様子や、弾圧時に挫折した経験については、ほとんど語られてきませんでした。そして、前述のように戦責告白のような自己批判の文に対して、その言葉を和らげようという気持ちは、なぜ起きたのでしょうか。私たちの教会の歴史観は、自由主義史観と似ている面があります。

そして自由主義史観で見ると、戦責告白のようなものは、全く「自虐史観」的なものとなるでしょう。確かに罪の赦しが必要ならばそのように言えるかもしれませんが。しかし、私たちの戦責告白の取り組みは、罪の赦しを信じる信仰者の営みです。

## 二 私たちの社会を見る目について

### ①戦時下の教会の社会を見る目

さて、私たちの教会の歴史を振り返り、過ちの部分に話が及ぶ時、ほとんどの場合、「そのような時代だった、時代の圧力があつた、今の人にあの時代のことは分からない」などと言われます。戦責告白は、そ

のような気持ちに理解を示す必要をも訴えています。

しかし、少し厳しい言い方をすれば、当時の教会が「そのような時代」をどのように理解していたのか、その理解の仕方にはかなりの問題を感じます。つまり、当時の社会をどのように認識していたかということです。ホーリネスは伝道一筋の教会であつたわけで、その点は私たちが受け継ぐべきことでありますが、天皇制の圧力や、治安維持法や宗教団体法などによつて包囲されながらも、それに気づかなかつた体質が、教会の挫折という結果となつたことは否定出来ません。これは弾圧の悲劇によつて覆われてはならない事実です。

## ②現在の私たちの社会を見る目

それでは今の私たちは、社会をどのように認識しているかが問われてきます。確かに私たちのあいだでも、例えば「地球が危機である」とか、「学校が危ない」、「昏迷の時代だ」などという、いわゆる社会を意識した発言がなされます。

しかし伝道一筋のために社会への関心が薄ければ、あるいは痛みを伴うような取り組みが普段からなされていなければ、口では「問題だ」と言いながらも、信仰さえあれば何とかなるといふ、安易なまた時として社会から遊離した解決を示す結果とはならないでしょう。リバイバルの希望や、宣教への情熱が繰り返し訴えられますが、それは「これさえあれば」という気持ちでどこかにあることを表してはいないでしょう。これは、リバイバルや宣教の情熱を軽視したり、否定しているのではないことはいふまでもありません。

ただ、社会に対する認識、つきつめれば人間を理解するための掘り下げが不十分なままに、福音を語つたとしても、私たちの言葉を通して福音は響かないのではないか、そしてそれが宣教の低迷の一因ではな



いかという、問題提起です。先に阪神淡路大震災に触れましたが、その理由もここにあります。

このように歴史を振り返ることによって、今の私たちの教会の問題が明らかにされます。戦争責任や天皇制などは社会問題であって、信仰とは関係がないと理解するのであれば、私たちは乏しい福音理解を続けてしまうことにならないでしょうか。

さらに問題に感じるのは、戦責問題や天皇制等の社会問題は福音の本質とは異なると言う人が、戦時下の教会が戦争に反対の態度をとれなかったことは問題だと言ひ、しかもその矛盾に気づいていないことです。つまり、天皇制等の問題に無関心でありながら、戦争に反対と言うことは決して出来ません。闇雲に反対を唱えることは出来るかもしれませんが。しかし教会にとって、その信仰にとつて何が問題だから反対するのかを理解していなければ、信仰の戦いすら戦うことは出来ないのです。

### ③ 信仰と社会の関係

一つ付け加えますと、仮に社会との関わりの必要性が訴えられるようになると、例えば「打倒天皇制」を叫ぶとか、デモに参加すべきなどと言つて、混乱が生じる可能性も考えられるでしょう。もつともそのような恐れがあつて、いわゆる社会問題は私たちのあいだでは敬遠され、信仰とは区別されているわけですが、戦責告白の趣旨は、それほど短絡的なものではありません。

戦時下の歴史が語られると、「現代にもう迫害は起こらないのか、もし迫害が起きた時、今の私たちは信仰の戦いをする事が出来るだろうか」などと言われます。しかしこれは、日本人キリスト者として愚かしく無責任な発想です。数年前の宗教法人法「改正」や、破壊活動防止法の団体適用の問題などは、私たちの教会が経験した試練と無関係ではありませんし、「愛媛玉串料訴訟」で政教分離の原則が貫かれたとは言え、それに反発する人々の動向にも無視できないものがあり、これも私たちの教会と関係のないこ

とはありません。この程度の社会認識しかもっていない今の私たちに、デモをするほどの実力はありませんし、また戦責告白はその必要性を訴えてはいません。

むしろ今の私たちに必要なことは、社会に対する認識を掘り下げて、その立場と姿勢を確立することではないでしょうか。そうすることによって、私たちの教会なりの対応が出来るようになり、社会に対する警告を発する必要がある場合は、警告を発することが出来るようになるでしょう。私たちが宣教の対象としている社会に対する認識を掘り下げることが、単なる社会運動ではなく、信仰の営みであり教会の宣教の業ではないでしょうか。そうすることによって、何よりも「伝道第一」という私たちの教会の特徴が、より生かされることになると思われるのです。戦責告白はそのための足がかりであります。

### 三 私たちの教会を見る目について

#### ①戦責告白の聖書的根拠

戦責告白には、ダニエル書とネヘミヤ記が引用されていますが、これらの聖句だけが戦責告白の聖書的根拠であるというよりも、そこに表されている共同体の理解が、戦責告白の聖書的根拠を理解するための要となります。そこで、ここでは共同体理解について考えることにします。

#### 1. 共同体の理解について

一人の人（アダム）の罪によって死が入って、全ての人が罪を犯し、一人（イエス）の義なる行為によって、全ての人に命が与えられるというのが、キリスト教の信仰です（ローマ五・一二以下）。

好むと好まざるとに關わらず、全ての人が罪の下にあるということは、私たちは既に人類という広い意味での共同体に属していることとなります。そしてその人間を愛して下さった神の救いの御業が主イエスの死と復活です。主の死と復活によって、贖われ、義とされたものによる、新しい共同体が生まれたのです。

それが教会です（使徒行伝二〇・二八）。教会が「キリストのからだ」であるとは、教会が主の死と復活による命と力に活かされている共同体であり（エペソ一・二三）、その命の源はかしらなる主ご自身にある（コロサイ一・一五以下）ことを意味します。

ですから私たちが「救われる」とは、罪を告白した者が、聖霊によって《イエスは主である》と告白して、キリストのからだに連なることです（イコリント一二・三、二七）。そうでなければ、二千年も昔の主イエスの死と復活は、今の私たちとは關係なく、今私たちが与る礼典も空しいものです。救いとは、決して個人の内面にとどまる出来事ではなく、新しい共同体、教会を形成します。

## 2. 共同体の罪について

ですから、教会は主イエスのゆえに罪を負いません。しかし、罪と戦わねばなりません（ヨハネ一七・一五以下）。そして教会は、理想的な存在ではなく世にある存在ですから、過ちを犯すことがあります。そのような弱い教会を支えて下さるのも主ご自身です（イヨハネ二・一以下）。特にこのイヨハネに記されている《わたしたち》という言葉は意味深長です。父なる神と御子イエスとの交わりに生きる教会を背景としています。

そして戦責告白に引用されているダニエル書とネヘミヤ記の言葉は、共同体の罪を端的に言い表しています。先に述べた新約の光によって理解する時、私たちは共同体の罪の悔い改めが何であるかを学ばされます。特にダニエルもネヘミヤも、先祖の罪を身代わりとして負うのではなく、自分の罪として告白して

いる点に注意すべきです。

### 3. 共同体の罪の責任について

さて、主イエスを信じて新しく生まれたものは、罪赦されたものです。それ以前の罪は神の前に問われませんが、その責任は残ります。以前の自分と今の自分は違うとは言えないのです。回心後のザアカイやピレモン書のオネシモの例が示す通りです。

キリストによって活きる教会は、なおさら主の憐れみにすがりつつ自らの責任を問わねばなりません。私たちには見過ごして来た過ちと責任があります。共同体に属する者としてそれらを直視し、自らのこととして悔い改めることが、私たちの真の教会形成へとつながるのです。

## ②教会理解と戦責告白

### 1. 日本の教会の中で、特に「日本ホーリネス教団」の戦責を問う理由

聖書は「教会とは何か」という教会の本質を私たちに示していますが、「教会はいかに在るべきか」については明確にしていません。ですから、各教派は自分たちの正しいと信じる方法によって、教会を形成しています。しかもそれは自己中心的な信じ方ではなく、聖書を正典と信じ、基本信条に立ち、牧師や信徒の務めに忠実であることによって、キリストの主権を表そうとするものです。このような営みをする教会を「正統的」、そして「聖書的」と呼ぶことが出来ます。

確かに多くの教派が存在するのは、教会や人間のエゴが原因である場合があります。そのような弱さを教会は常に自覚しなければなりません。そして自らを聖書の示す真理によって規定し、改革しようとすることによって、神のみ旨に適う教会の形成が実現するのであって、教派の存在は決して否定されるようなことではありません。教会が「一つ」であるということは、渾然一体となるのではなく、多様性があり

つつ一致出来るということです。

ですから、私たちが聖書的な教会の形成を目指すのであれば、さきに触れたような聖書が示す教会に連なっている自覚を持つと共に、現在私たちが連なる「ホーリネス」という教会とその伝統を理解し、検証する必要があると思います。そのために、私たちは一九〇一年からの歴史を振り返ります。そこでこの解説でも言及している創立時期や名称の問題等、さまざまな課題を私たちは見出します。そして、一つ一つの課題に取り組むことが、私たちの教団が「正統的」な「聖書的」な教会として形成されるための過程となることでしょう。

このように、「日本ホーリネス教団」の職責を問うことは、私たちの教団のアイデンティティを問い、真剣に信仰告白に生きようとする作業でもあるのです。

## 2. 特に戦時下の罪責を問う理由

教会が過ちを犯すのは、戦時下に限ったことではありません。しかし特に戦時下の罪責を明らかにしなければならぬ理由は以下の通りです。

まず、これまでも触れてきましたように、戦時下の教会が問われたのは、天皇制とキリスト教信仰の関係と、国家の圧力のもとでの信仰告白（特に四重の福音の再臨信仰をめぐって）の問題でした。ここに、日本に生きるホーリネスの「教会の本質」に関わる、避けて通れない課題が含まれています。それは聖書的な教会として立つか倒れるかという課題であり、枝葉の問題ではありません。

次に、これもこれまでに触れたことですが、戦時下の私たちの教会と関わる、諸国、諸教派、また関係者との間に、亀裂が存在しているためです。それを放置するのは、聖書的な教会の在り方ではないことは言うまでもありません。

このように、「聖書的」というのは、理想的なことであるとか、何書何章何節に書いてあるというよう

なことばかりではなく、聖書が示す教会の本質に忠実であることです。見える教会に忠実でなければ、見えない理想の教会を目指すことも出来ないでありましょう。

戦責告白採択後、教団等を批判する際に、謝罪や和解などという言葉が、安易に用いられる傾向がありますが、教会の本質を見据え、教会を愛し、また重荷を共に担う決意があるところに、健全な批判と教会の形成がなされることでしょう。

### ③ 戦責告白と信仰告白

以上のように、戦責告白理解の要となるのは教会理解ですが、その教会理解の要となるのは信仰告白です。戦責告白本文にもあるように、教会は信仰告白を中心とした共同体ですが、私たちの教会では、カリスマを持った指導者に負うところが大きく、教会の言葉としての信仰告白は軽視されてきたと言えます。個人の信仰告白はなされてきたのですが、それが共同体に連なるという意識が極端に低かったのです。洗礼についてはキリスト者となるしとしては重視されつつも、聖餐については教会形成のために重要視されてきたとは言えない理由は、この辺りにあるとも言えるでしょう。

そして、戦時下の教会が天皇制や軍国主義の圧力の中で、屈してしまつた最大の理由は、信仰告白をもたなかった点にあります。信仰告白のような教義はあったのですが、戦責告白本文にあるように、またこの解説でも説明しているように、私たちの教会はそれをも曲げて、国家の政策に追従したのです。

信仰告白の軽視は、実はホーリネスに限ったことではありません。日本基督教団成立の際、あらゆる教派が信仰告白を捨ててしまつたと言つても良い状況に陥りました。ころある人々が、日本基督教団の成立に反対した最大の理由は、信仰告白がないという点にありました。少数派の意見は聞き入れられませんでした。わずかに日本聖公会の例があるくらいです。そして日本の教会は、無自覚に戦争協力へと邁進

したのでした。日本の教会をそこまでおとしめた力は、この解説でも再三ふれる天皇制にあります。

ですから、もともと信仰告白に対する意識が低かった私たちの教会にとって、信仰告白を重視して教会を形成するのかが、信仰告白を軽視したまま内面中心の信仰を伝えるのか、この選択と決断は非常に大きな意味を持っています。

これは、戦責告白本文の「私たちの教会の信仰の問題を曖昧にしません」という言葉が意味するところですが、誤解を恐れずに言えば、他教派や関係国との和解交渉がどんな成果を得ることが出来たとしても、この点が曖昧になつては戦責告白の趣旨は全く理解されていないことになります。

#### 四 戦責告白の趣旨

##### ① 過去を糾弾するものではない

まずこの戦責告白は、私たちの教会の過ちを糾弾しようというものではありません。確かに戦責告白では、私たちの教会の歴史を振り返り、その過ちを明らかにしようとしています。けれども、現在の私たちの尺度でもって、かつての教会の歩みを軽率に判断し、批判することは出来ません。

例えば、私たちの教会の関係者の中にも、かつての戦争に携わった方がいます。そして、あの戦争は侵略戦争であつて日本は過ちを犯したと言う場合、命の危険にさらされた方々に向かつて、あなたは過ちを犯したと言える資格を誰がもっているでしょうか。また、確かに私たちの教会は、戦時下に様々な挫折を経験しましたが、だからと言つて、弾圧を経験した方々に向かつて、あれは信仰による抵抗ではなかつた

と誰が言えるでしょうか。

戦争責任というと、その当事者は誰か、責任者は誰か、という問いが必ず起きます。それも重要なことなのですが、戦責告白は敢えてそのことをしていません。その理由については、この「解説」によってお解りいただけるのではないかと思います。

しかしこれは、かつて昭和天皇の戦争責任を不問に付したように、責任を曖昧にしようとするものでは決してありません。むしろ「悪いのは軍部であった」、あるいは「悪いのは東条であった」というような責任回避の姿勢を、何としても避けたいのです。

ですからここで大事なことは、当時の日本がなぜあのような戦争をしたのか、そして私たちの教会はどのような態度をとったのかという「事実」を知り、その理由や原因を考えることです。そうすることによって、現在の私たちのおかれている社会の状況や、教会の体質が明らかになってきます。そして批判の矛先は、過去の日本や教会ばかりではなく、今の私たちに向けられます。つまり、戦責告白が取り上げようとしているのは、現在の私たちの課題であり、それに取り組むことによって、私たちの進むべき道を明らかにしようとするものです。

## ② 謝罪文ではない

第二に、戦責告白は基本的には「謝罪文」ではありません。実際には謝罪の言葉が入っており、戦責告白はその気持ちを表すためのものでもあります。しかし、まず謝罪に必要なことは、過ちの事実を知ることと、その過ちについて痛みを感じることです。これらを抜きにして謝罪は有り得ません。

けれども私たちの教会では、その歴史の良い点については語られて来たのですが、そうではない部分についてはあまり知らされて来ませんでした。もちろん、歴史についての評価には多様性があるべきですが、



それにしても私たちの教会は、歴史の中の特に過ちについてはその事実を知らず、無関心でありました。戦責告白は、この点についての認識を新たにしようというものです。

例えば、国の責任を認めず、また侵略や虐殺などなかったという意見を、内に抱えながら繰り返される、私たちの国の政府首脳謝罪が、アジア諸国から冷ややかにあしらわれることがあるように、自分たちの教会の歴史も知らずに謝罪をしたとしても、果たしてそれはアジア諸国とその教会の人々に受け入れられるものでしょうか。事実を知らぬものに謝罪は不可能なことですし、その認識がなければ、私たちは笑いながら謝罪してしまうことも出来るのです。

また、教会が発する謝罪の言葉には、今後の交流や宣教を計算に入れたような、戦略的な意向という誘惑が付きまとうものようですが、そのような思いも払拭されねばならぬはずで、この点についての認識が乏しければ、教会のエゴが露呈される稚拙な謝罪になりかねません。

ですから、この戦責告白によって、過去を水に流すというような意味での「けじめ」がつくということではなく、これらの課題についての取り組みは、これから始まるのです。そうすることによって、私たちの謝罪が真実なものになるでしょう。このようなわけで、基本的には謝罪文とは言えないのです。

したがってこの戦責告白は、この謝罪に基づく賠償など、具体的な責任の取り方を明示するものでもありません。この点についても、いくつかの事柄は記されているのですが、しかしまだ抽象的であり、批判もある点です。しかし、戦時下の慰安婦への民間基金による賠償の問題によっても分かるように、具体的な賠償に至るまでの段階が重要です。今の私たちには、責任をとる段階に至るまでの手続きが必要だと考えます。それは繰り返しになりますが、事実を知り、その原因を考え、現在のキリスト者の課題として受け止め、謝罪することです。この戦責告白は、そのための第一段階に過ぎないのです。

### ③ 自己告発である

そこで、この戦責告白の一番の目的は何かというところ、「自己告発」ということになりません。繰り返しますが、今の私たちの教会の在り方を問うものです。このことを念頭におきながら、読み進んでいただければと思います。

なお、自己告発とか自己批判ということについては、諸教派の中にも、また一般社会においても根強い抵抗があります。私たちの教会内にも起こったことです。一般的に自己批判は、自虐的であるとか、愛国心が持てないなどと言われます。前述の自由主義史観などがその例ですが、そのような歴史観も一つの歴史観としては尊重されるべきでしょう。

ただし、成熟した目で歴史を見ることが出来なければ、そこに対話は生まれません。自己批判に反対する立場の人々によれば、日本は戦前のヨーロッパ列強の植民地支配から、東南アジア諸国を解放したといえるのですが、確かにそのような面があったとしても、それだけで日本が行った侵略は正当化されるわけではありません。また天皇の「ご英断」によって戦争が終結したので、天皇は平和主義者などと言われますが、それでは天皇の名によって戦争が始まったことについては、どのように理解するのでしょうか。このような他者を悪として、自らを善とする理屈は、真の愛国心に結びつくものではないはずです。

これを私たちの教会に当てはめると、私たちの教会は、戦時中、他の教派が信仰を捨てても、ホーリネスだけは信仰を貫いたと教えられてきました。実はそうではなかったにもかかわらずです。それは、他者を悪として自らを善とする理屈とどれほど違うものでしょうか。実際に、自分たちの教会は正しかったという思いが、私たちの教会の誇りであり、アイデンティティではなかったでしょうか。

逆にかつての日本の行為を批判する立場の中にも、例えばある女性ジャーナリストの戦時下の慰安婦に

ついでの見解に対して示されたような、ヒステリックな反応や、対日批判が政治的な意図によってなされる場合や、アメリカを中心としたかつての連合国の方針が全て正しいかのような考えもあるわけですが、それらは正しい批判にはなっていないと思います。

これも教会に当てはめるならば、教会の過ちが少し明らかになっただけで、安易な批判がなされたり、当事者の責任追及によって義憤にかられたり、あるいはドイツの告白教会やボン・ヘッファーがすぐに引き合いに出されたりするわけですが、どれだけ状況を把握し、教会の本質に関わる問いをもってなされる批判でしょうか。それらは、ボン・ヘッファーの意志とも、全くかけ離れたものであると思われれます。

ここで訴えている自己批判は、相対化することによって責任の所在を曖昧にしないというものです。自己批判とは自己卑下ではありません。《罪の増し加わったところには、恵みもますます満ちあふれ（ローマ五・二〇）》なのですから、私たちに必要なことは、ホーリネス教会のかしらであるイエス・キリストと、またそれゆえにホーリネス教会を愛する思い、そしてホーリネス教会の枝であることを止めずに、共に重荷を負っていくという決意です。

その意味では、諸教派から出されている戦責告白とその後の取り組みに、学ぶところは多いと思います。また一般的なものとしては、ヴァイツゼッカー前ドイツ大統領のあの演説や、ドイツの取り組み、また最近のそのドイツとチェコの和解などは非常に興味深いものです。そして原爆の投下を正当化し続けるアメリカでさえ、戦時中に日系アメリカ人を強制収容したことの非を認め、謝罪したことなどは、私たちに大きな示唆を与えるものであると思います。もちろん、これらは単なる理想ではありません。根強い反対のある中で生まれてきた成果であり、そこに意味があるとも言えるでしょう。私たちは、キリスト者として、このような取り組みをしようとしているのです。